ＪＦ大分
水産おおいた
発行元
大分県漁協
http://www.jf-oita.or.jp/

大分県２巡目は おんせん県おおいた大会

第43回 式典会場は大分市
海上歓迎・放流行事は別府湾
第1回実行委で決定（▽2面）

みのりフェスタ開催

県農林水産祭「おおいたみのりフェスタ」が22、23日の両日、別府公園で農林水合同で開催された。水産からは昨年を上回る16店舗が出展し、連日大勢の家族連れなどでにぎわった。

開会式

実行委員会長の広瀬勝貞知事は開会にあたり、「今年は先の台風14号など多くの災害に見舞われ農林水産業は大きな影響を受けた。来場者の皆さんは生産者と交流し、励まして頂きたい」と呼びかけた。

県漁協は、中津のひがた美人、杵築の骨切ハモ、国東のヒジキ、保戸島のマグロブロックなど各支店が特色ある産品を販売した。日出や佐賀関の鮮魚、国見のたこめし、下入津のブリかま焼きには順番待ちの長い列もできた。海洋科学高の缶詰やギョロッケも評判を呼び、水産コーナーは2日間を通して人通りが絶えなかった。

ひがた美人の蒸しカキを試食する広瀬知事

広瀬知事は水産の各ブースを視察し、中津支店では中根組合長の勧めに応じてひがた美人の蒸しカキを試食。「濃厚な味わいだね」と高評価を頂いた。

土曜日の午後には、メインステージで「お魚クイズ・チャンピオン大会」を開催した。景品のマグロブロックを目指して、来場者に楽しいひとときを過ごしていただいた。

今回も、昨年に続き農林部門と水産部門の合同開催となった。会場の制約から「ブリのつかみどり」といった、水産部門特有のイベントはできなかったが、各支店の工夫により昨年以上に盛り上げることができた。

来年度は、全国豊かな海づくり大会のプレ大会との絡みもあり、どのような形で開催するのか検討が必要になる。

お魚クイズ チャンピオン大会

3 面
漁業士等と意見交換会

北海道・厚岸プレ大会開催

4 面
かぼすブリ旬入り宣言

かぼすふぐお披露目

5 面
台風被害額15億円超
インボイス制度とは？

6 面
水研だより

第43回 全国豊かな海づくり大会
～おんせん県おおいた大会～

県は3日、「第43回全国豊かな海づくり大会」実行委員会（会長・広瀬知事）を設立し、第1回総会を開催した。

まず、大会の基本構想を決定し、名称を「第43回全国豊かな海づくり大会～おんせん県おおいた大会～」とすること、令和6年秋季の土曜・日曜日の2日間で開催することを決めた。

次いで、式典行事開催会場として大分市のiichikoグランシアタを、海上歓迎・放流行事開催地として別府湾（別府港第4埠頭）を決定した。

また、4年度の事業計画及び収支予算を承認し、本年度は今回の実行委員会のほか、幹事会及び専門部会各2回を開催し、企画運営・広報事業として大会テーマ等を公募することとなった。

副会長に就任した中根組合長は閉会に当たり、「本日、基本構想、開催地が決定し、スタート地点に立った。地元別府湾の漁業者として、また県漁協の代表として、大会が成功し県全体の漁業振興に繋がるよう積極的に取り組む」と決意を表明した。第1回開催地の田中佐伯市長も「第43回大会に向け一緒になって努力したい」と激励した。

大会の概要

（１）名　　称　　第４３回 全国豊かな海づくり大会 ～おんせん県おおいた大会～

（２）主　　催　　豊かな海づくり大会推進委員会
　　第４３回全国豊かな海づくり大会大分県実行委員会

（３）開催時期　　令和６年秋季（土曜・日曜日の２日間）

（４）開催場所　　式典行事　　：　iichikoグランシアタ（大分市）
　　海上歓迎・放流行事：　別府港第４埠頭（別府市）

基本理念

大分県の豊かな海や川を次代へ引き継いでいくため、つくり育てる漁業に一層取り組むとともに、それらを育む自然環境を守っていくことの重要性を県内外へ広く訴えかけます。
また、四季折々の味力あふれる多様な水産物に加え、「おんせん県おおいた」の新たな魅力を全国へ広く発信していきます。

基本方針
（基本理念を支える４つの柱）

①水産資源の保護と管理の一層の推進

水産資源の維持・増大を図り、「生産者の挑戦と努力が報われる漁業」の実現に向け、令和５年度にリニューアルする大分県漁業公社を核に、つくり育てる漁業をさらに推進するための大会とします。

②森から川、海へとつながる豊かな自然環境の保全

森から川へ、川から海へとつながる自然環境や藻場造成などによる良好な沿岸環境の保全とともに、近年、国際的に大きな問題となっている海洋プラスチックゴミや地球温暖化などの環境問題に取り組むことの重要性について県内外へ広く訴えかけることで、本県の豊かな海や川を次代に引き継いでいく大会とします。

③四季折々の多様な水産物の消費拡大

「関あじ関さば」、「城下かれい」、「かぼすブリ」、「姫島車えび」などのブランド水産物をはじめ、本県の海や川で育まれた四季折々の多様な水産物の味力を県内外へ発信し、消費拡大を図る大会とします。

④おんせん県の新たな魅力を全国に発信

「宇宙港」としての発展が期待される大分空港、日本唯一の海上交通であるホーバークラフトの復活など本県では地域の活性化に向けた新たな取組を次々と展開しています。
令和６年春のデスティネーションキャンペーンとあわせて、新たな魅力を全国に発信する大会とします。

1年前プレイベント開催

2日の日曜日、厚岸町の厚岸漁港で「第42回全国豊かな海づくり大会・北海道大会」の1年前プレイベントが開催された。

当日は、水産関係者約150人が出席し、大会テーマ・大会ロゴマーク等お披露目、北海道大会カウントダウンボード除幕式のほか、漁船などによる海上歓迎パレード、マツカワ、ホッカイエビの記念放流が行われた。後催県となる本県からも3名が視察した。

本大会は、本県の1年前、来年の9月16日・17日の両日に同会場で行われる。

大会テーマ・大会ロゴマーク等お披露目

記念放流（マツカワ、ホッカイエビ）

漁業士等と意見交換

新規の漁業就業者を育て、地域で支援するには

県下一斉休漁日となる第2土曜日の8日、県水産会館において「大分県水産業の発展に向けた意見交換会」が開催され、漁業士や新規就業者ら53人が参加した。

まず、本会の特別顧問である広島大学大学院の山尾名誉教授が、今回のテーマである「新規の漁業就業者を育て地域で支援するには」について趣旨を説明。国が進める「資源管理の強化と成長産業化」を担う新規就業者を、どのように受入れ育成すべきか議論したいと提案した。

次いで、県漁協佐賀関支店の永倉和久氏が「一本釣りで新規就業者となって」、また、臼杵地区漁業運営委員長（県漁協理事）の薬師寺正治氏が「地域で新たな担い手を受入れるには？」と題し話題提供をした。永倉氏は、漁業就業フェアに参加して大阪から移住した体験をもとに、住居や家族の就業の場の確保と収入が安定するまでの数年間の財政支援が必要とするとともに、新規就業者が次の師匠になるべきとの意見を述べた。薬師寺氏は、自ら営むまき網漁業を平成4年に法人化し、給料を歩合制から月給制に変更して若い人が就業しやすくした実績などを紹介した。

山尾特別顧問

永倉和久氏

薬師寺正治氏

これらの話題を踏まえ、6班に分かれてグループ討論を行った。担い手対策としてすぐに必要な短期的課題と将来にわたる長期的課題に分けて議論した。

短期的課題としては、就業後の収入確保。行政支援を求める声がある一方、複数漁業の組み合わせによる年間収入の安定、地産地消やSNS活用による販売対策も上げられた。他地域に人材を求める前に地元の漁師子弟対策も必要とする意見も出された。

長期的な課題としては、住居環境や漁村インフラの整備、漁業と養殖業の組み合わせや農業との兼業、資源管理の徹底と漁業制度の見直しにも言及した。

そもそも資源が減る中で新規参入は必要かという議論もあり、複数の漁業者がいないと漁場開発は出来ない、水揚げロットが揃わず販売に不利。地域としての漁村が維持できないなどの声が聞かれた。

ベテラン漁業者を中心とした班と新規就業者の班では、問題意識も異なったが、参加者全員が真剣に考える機会となった。今回の漁業者の声が、新しい長期計画に反映されることに期待したい。

かぼすブリ旬入り宣言 ＆ かぼすフグお披露目

28日の早朝、「おおいた県産魚の日」運営委員会（山上誠二会長）は大分市公設地方卸売市場において、「かぼすブリ」の旬入りと「かぼすフグ」の初出荷をPRした。

山上会長の開会あいさつに次いで県農林水産部の佐藤章部長が祝辞を述べ「生産量の約4割をこの大分市場で扱っている「かぼすブリ」は誰もが知る大分県を代表する県産魚として浸透した。「かぼすフグ」はいよいよ来月から初出荷を迎えるが、今後は大分県を代表する魚になるように期待している」と生産者を激励した。

「かぼすブリ」の旬入りを県漁協が宣言し、今年も「味よし、香りよし、見た目よし」の三拍子そろった「かぼすブリ」のご愛顧を呼びかけた。

次いで、県水産養殖協議会トラフグ養殖部会の高瀬興治会長が「かぼすフグ」の11月1日初出荷を宣言した。ほのかにカボスが香るさっぱりとした「かぼすフグ」を県民に愛される魚に育てて欲しいと宣伝した。

生産者から流通関係者に「かぼすブリ」と「かぼすフグ」を贈呈し、試食会を行った。市場関係者の評価は上々で、年末年始の売上に弾みがつきそうだ。

カボス養魚の第４弾「かぼすフグ」の出荷を広瀬知事に報告

市場でのお披露目に先立つ19日、「かぼすフグ」の生産者は県庁に広瀬知事を訪ね、11月1日から本格出荷を開始することを報告。

試食をした知事は「より爽やかさが増し、おいしい。これは人気が出る、売れると思う」と絶賛した。

全国漁港漁場大会開催　函館で

全国漁港漁場協会（橋本牧会長）は19日、北海道函館市の函館アリーナにおいて第71回全国大会を開催した。コロナ禍で3年ぶりの開催となり、全国から1400名超、大分県からは会長の藤本姫島村長、副会長の中根県漁協組合長ら21名が出席した。

大会では、水産物の消費形態の変化、温暖化等地球環境の悪化、台風・地震等災害リスクの増大等の課題を克服し、水産業を魅力ある産業として次世代に伝え、漁村を豊かで安心して暮らせる場とするため、4項目にわたる推進案を採択した。

また、漁港漁場漁村整備促進議連会長の衛藤征士郎代議士は「国土強靭化や長寿命化の推進、漁村の賑わい創出に向け、総合的かつ迅速に取り組む」と挨拶した。

【採択された提言項目】

- 水産業の成長産業化に向けた漁港の生産・流通機能強化や増養殖の推進
- 海洋環境の変化に適合した漁場整備による水産資源の回復や生産力強化の推進
- 大規模災害に備えた漁港・漁村・海岸の強靭化対策、超寿命化対策の推進
- 地域資源・人材の活用や漁港の多様な利用による海業の振興と漁村活性化の推進

挨拶する衛藤議連会長

台風14号

水産被害額は15億円超

県は24日、9月の台風14号による農林水産業の被害額（確報）は72億9千万円余となったと発表した。

このうち水産業は15億円4千万円を超え、特に水産物被害が大きく11億6千万円に上った。台風による暴風や波浪から養殖施設を守るために避難した入津湾において、赤潮の発生に伴う酸欠が起き、養殖ブリ等が大量死したことが被害を拡大させた。

台風14号による農林水産業被害

区　分		件数	被害額（千円）
水産業	水産物（養殖ブリ類、養殖マグロ等）	27	1,163,011
	水産施設等（県漁協施設を含む）	130	240,865
	漁港施設（護岸、漂着物等）	66	137,600
	水産業計	223	1,541,476
農　業	農地農業用施設、農作物、生産施設等	4,423	4,898,086
林　業	林地、林道、治山施設、林産施設等	201	850,941
合　計		4,847	7,290,503

御礼

令和四年台風十四号に伴う被害に対し農林中央金庫代表理事理事長奥和登様から過分なる見舞金を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

インボイス制度について学ぶ

大分税務署 総括国税調査官が講義

18日、水産会館において「インボイス制度に関する説明会」を開催した。大分税務署個人課税第一部門の統括国税調査官大藏剛氏に講師をお願いし、県漁協本支店の職員が制度の概要を学んだ。

まず、消費税の基本的な仕組みについて、「課税事業者」と「免税事業者」に分かれ、2年前の課税売上高が1千万円を超える事業者が消費税の納税義務者である「課税事業者」となること。「免税事業者」でも「課税事業者」になることを選択できること。仕入税額の控除を受けるには「適格請求書（インボイス）」等の保存が必要となること。インボイスは登録を受けた事業者のみが交付でき、「課税事業者」であっても未登録の事業者は交付できないとの説明があった。

次いで、インボイスの記載事項と留意点、漁協等を通じて取引される水産物等に対する特例が示された。

詳細についての説明は数時間を要するため予約の上で税務署主催の説明会に来るようアドバイスがあったが、今回の概要説明で県漁協への影響も浮き彫りになった。

組合員から漁協が水産物を買い取り、これを量販店等に販売し、量販店等が消費者に販売することを想定する。ここで問題となるのは、組合員の多くが「免税事業者」となる中小漁業者であり、これまでは水産物の対価として漁協から消費税を含む金額を受領しても消費税の納税義務はなかった。今後、このような組合員が「課税事業者」になることを選択し、登録を受けてインボイスを発行すれば、漁協は仕入税額の控除を受けることができるが、組合員は納税義務を負い、これまで収入としていた消費税相当額を失うこととなる。組合員がインボイスを発行しない場合、これを理由に漁協が消費税を上乗せしないで支払う場合も組合員は同額を失う。一方、「免税事業者」である組合員の収入を維持するために、これまで同様の取引を行った場合は、漁協は仕入税額の控除を受けることが出来ない。漁協の買い取り実績を勘案すると、控除を受けらずに漁協が負担することになる消費税は多額に上ると見込まれる。

すなわち「インボイス制度」とは、これまで「免税事業者」が免除されていた消費税についても、誰かにきっちり払わせる制度だと言える。買取販売では組合員が負担するのか、漁協が負担するのか、厳しい選択を迫られることになりそうだ。

水研だより

テングサ人工種苗を用いた藻場造成の取り組み

ゼリーや美容品に利用される寒天は、海藻類のテングサやオゴノリから作られています。また、夏の風物詩である“ところてん”もテングサが原料となっています。このテングサは『藻場』と呼ばれる大規模な群落を海底に形成します。『藻場』は、稚魚などの生き物の生育場、環境浄化や二酸化炭素の吸収といった多様な機能を持っており、海洋生態系と水産業において非常に重要な役割を担っています。そのため、近年は組合員の皆さんによる『藻場』の保全活動が精力的に行われています。しかしながら、昨今、海藻類が衰退する“磯焼け”という現象が各地で深刻化し、本県でもヒジキ、クロメ、カジメ、アカモク、テングサ等の天然資源が減少傾向にあります。“磯焼け”の原因には、海水温の上昇、魚類等の食害、海の貧栄養化等が考えられており、早急な対策が求められています。

そこで、北部水産グループでは、藻場造成に取り組む支店に人工種苗の提供と技術支援を行っています。今回は、テングサについて紹介します。

テングサの人工種苗は、2021年11月から種苗生産にとりかかり、2022年の6月までに約900本（サイズ2～4cm）を作出しました（写真1）。この種苗を建材ブロックに括着させ、7月から蒲江と香々地の各地先で藻場造成に取り組んでいます。各地先には、種苗400本を括着させた建材ブロック20個ずつを海底に固定し、魚類からの食害を防御するカゴや施肥剤もセットしました（写真2～3）。現在、定期的に魚類の食害防御効果と施肥による種苗の生長促進効果を経過観察しています。

なお、今年は種苗1万本以上の作出を目標に種苗生産を実施中です。ゆくゆくは建材ブロック500個を県内各地先に設置し、テングサ天然資源の回復に寄与したいと考えています。

（北部水産グループ養殖環境チーム　入江研究員）

写真1　香々地に設置したテングサ人工種苗（2022/9/29設置、日齢228～317日目、葉長5cm、20本/ブロック）

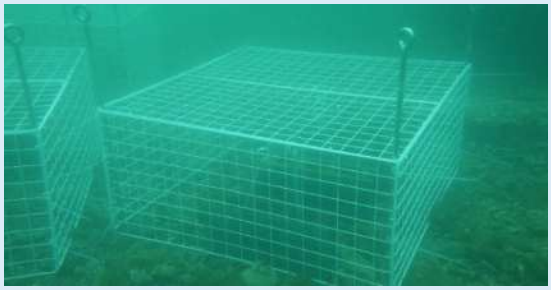

写真2　人工種苗が括着した建材ブロックを食害防御カゴで覆って設置（蒲江2022/7/27設置）

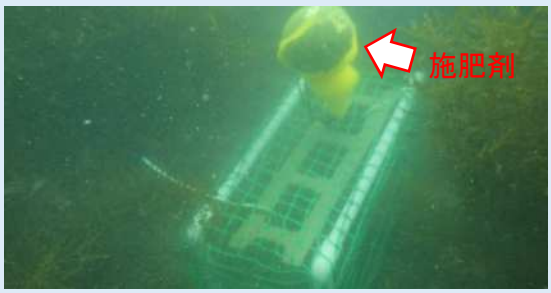

写真3　食害防御カゴと施肥剤をセットした人工種苗（香々地2022/9/29設置）

海区漁業調整委員会　第13回委員会

5日、県水産会館5階研修室において、第13回大分海区漁業調整委員会が開催された。

第1号議案では「宝石サンゴの採捕禁止について」貴重な資源を守るため、県漁協の要望に基づき、隣県と協調して採捕を禁止する委員会指示を発出することに決した。

また、第2号議案では「知事許可漁業の制限措置及び申請期間並びに許可の有効期間について」知事の諮問を受け、許可の有効期間満了に伴う「中型まき網漁業（愛媛県及び宮崎県漁業者）」並びに「たい・はも・ふぐはえ縄漁業（愛媛県漁業者）」の入漁について、知事に問題ない旨を答申することに決した。

大分・愛媛間の入漁は豊予連調委（4年9月15日）において、大分・宮崎間は大分・宮崎連調委（3年8月31日）において、それぞれ更新について合意した。

◇第６回理事会を開催◇

26日、第13回理事会を開催した。

第1号議案「組合員の異動について」、第2号議案「電子交換所参加に伴う手形取立等各種手数料の改定について」、第3号議案「総会の部会の開催について（安岐支店）」及び第4号議案「総会の部会の開催について（佐賀関支店）」、いずれも原案のとおり承認することに決した。

また、協議・報告事項として、①余裕金の運用状況報告について、②JFマリンバンク基本方針に定める早期指導先の選定及び資産精査の指定について、③支店・取次店・工場等の再編に向けた取組方針について、④台風14号の被害報告について、⑤第43回全国豊かな海づくり大会について、⑥漁港施設適正管理事業（仮称）について及び⑦次回の開催計画について報告した。

②については、農林中央金庫福岡支店の志野英樹JFマリンバンク九州担当部長が、指定された理由や今後の対応等について詳細に説明した。

③については、行政区単位の事務統合を基本に検討を進めることを説明し、本項のみ議決により全員の同意を確認した。

なお、⑤は県漁業管理課から⑥は県漁港漁村整備課から説明をいただいた。

10月1日付け

辞令交付

（左から）中村総務部経営管理課係長、中根組合長、神田佐伯支店長

令和4年度の下半期を迎えた3日、県漁協本店の組合長室において、2名の幹部職員に中根組合長から辞令が交付された。

お二人の益々のご活躍を祈念します。

サカナをたべれば幸福が見えてくる

オシウメ

今回は麺類。津久見市「もくれん」の「まぐろチャンポン」900円也の登場。

多くのファンを魅了する逸品だ。マグロはツミレと切身がトッピングされ、奥深い味わいを醸し出す。カリッと焼いた麺に和風だしのスープが絶妙のハーモニーを奏でる。とにかく定期的に食べたくなる満足の一杯である。

本場保戸島の味を再現したとされる「ひゅうが丼」も絶品。若い人にはボリュームたっぷり、チャンポンと丼のセットメニューもお薦め。

10月の県産魚の日は「"絶品"津久見地魚フェアスタ」と銘打って、おさかなランド3店舗で旬に入ったモイカ（アオリイカ）をはじめタチウオやイトヨリダイなどを特売した。

お客様には新鮮さをアピールし、好評をいただいた。

第43回全国豊かな海づくり大会実行委員会は、大会テーマ等を募集している。皆さん方もぜひ、ご提案下さい！

募集内容	
テーマ	大会の開催意義、基本理念を簡潔に表現した標語・スローガンを募集 ※全国大会の位置付けから、「大分県」、「九州」、「開催地名」等の地域を特定する言葉の使用は避ける。 S56年開催　大分県「育てよう　豊かな海を　ふるさとを」
コスチューム デザイン	大分県応援団"鳥"「めじろん」のコスチュームデザインを募集 ※大会趣旨を踏まえた大分県の水産業をイメージさせるデザイン ※キャラのイメージを損なわず、着ぐるみを想定したデザイン ※希望によって市町村のキャラクターが使用することも想定
ロゴマーク デザイン	大会周知と県産魚PRにも活用できるようなロゴマークデザインを募集 ※大会終了後も継続活用を想定

豊かな海からの贈り物 ふくおかの魚

編集後記

コロナの感染者数は下げ止まってしまった様子だが、国や県の施策が奏功し経済活動は活発となり、対面式の会議やイベントも当たり前に行われるようになった。

農林水産祭も人数確認をしながらの開催ではあったが盛況で、水産部門も出展数を増やして各地域の特産水産物をアピールすることが出来た。

就任以来お会いする機会がなかった近県の漁連や漁協の皆さんとも、最近は懇談の場が持てる。先月は宮崎県漁連の職員さんが合併に向けた先行事例の調査にお見えになり、また当漁協は県域の漁協として同じ課題を抱える山口県漁協を訪問し、意見を交換させて頂いた。

組合員も職員も減少と高齢化が進む中、生産者団体には「規制強化」の逆風が吹いている。会計監査人監査への移行はもとより、流適法やインボイス制度への対応にも苦慮する。

苦慮と言えば、組合長の県外出張が増え、代役をこなすことが増えた。かぼすフグの知事報告、かぼすブリの旬入り宣言と続き、今月は育樹祭への出席など、シャイな性格なのでドキドキしながら務めている。